

小学校におけるチーム支援へのコンサルテーション —保護者支援、学級担任支援の事例を通して—

特別支援教育学専攻
特別支援教育コーディネーターコース
M08117H 片瀬 廉士

I. 問題と目的

平成19年度より特別支援教育が本格的に実施され、地域支援の充実が一層求められるようになった。センター的機能を持った特別支援学校がその役割を果たしている場合が多いのだが、地域によっては、これ以外の地域の拠点校のコーディネーターがそれを担当し、学校コンサルテーションを実施する場合もある。

学校コンサルテーションを実施する場合、コンサルティの専門性や意欲などが十分でない場合、高い効果が得られない場合も出てくる。

だからこそ、気づきを促し多面的に対象を見るために、多様な関係者によるチームアプローチ(柘植,2007)を、意識的にすることが必要である(石隈・田村,2003)。ケース会議の場で、同僚・専門家・保護者などと一緒に支援方法を探ることによって、苦戦している学級担任の支えとなり、児童への有効な支援に繋がる。

保護者に関しては、家庭生活上に困難があつて支援を求めている場合と、我が子の専門家として情報を提供し、自身の役割として支援を実施できる場合がある。ここに、保護者もケース会議に参加する意義がある。

そこで本研究では、小学校において児童を支援していくための、校内コーディネーターが中心となって進めるチーム支援の在り方、保護者支援の在り方、また、その際に地域型コーディネーターとしてどのように連携していくべきかについて考察をしていく。

II. 対象

1) 対象校

- ・学校 A市立B小学校
- ・児童数約560名
- ・特別支援学級 2学級

2) 対象児

- ・3年 R児 男児 診断名なし
- ・他者とのコミュニケーションに課題あり

3) 母親

- ・子どもとうまく関われない。
- ・細かなことまで厳しく注意してしまう。

4) 学級・担任

- ・Y先生 30代女性
- ・200X年度よりA市に異動。

5) 校内コーディネーター

- ・2名体制(特別支援学級担任)
- ・校内の教育相談を担当

III. 手続き

1) 期間 200X年5月～11月

表1 支援経過

日時	内容
実態把握期 (5月)	◆児童・保護者の実態把握 ◆目標の決定
第1次介入期 (6～7月)	◆手立て (実行→評価→修正)
第2次介入期 (9～10月)	◆目標の決定 ◆手立て (実行→評価→修正)
移行期 (10～11月)	◆学校主体の支援へ ・司会の変更

2) チーム支援

図1のように、R児への学級担任・母親・CoA・B先生のチームRを結成し、約2週間に1回の頻度でケース会議を開き、チームに対してコンサルテーションを実施した。

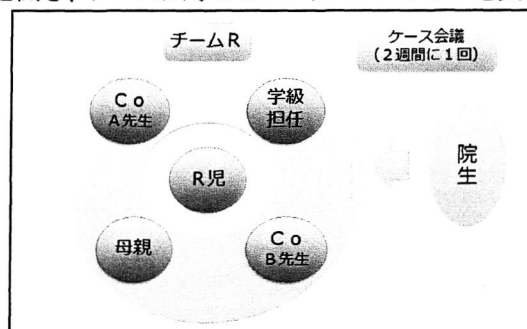


図1 チームRの関係図

3) 評価

- ・ケース会議の様子をボイスレコーダーやビデオで記録。ここでのコンサルテーションから、R児(意欲、行動)、母親(特性理解、関わり方)、学級担任(特性理解、行動)、コーディネーター(心情理解、行動)がどのような過程を経て変化したのか、エピソードから分析する。
- ・母親、学級担任、コーディネーターに実施したアンケートの結果から、ケース会議、R児の支援、母親の支援、学校の対応、今後に向けてについて、分析・評価した。

IV. 支援の結果(一部抜粋)

ケース会議の経過

1) 実態把握期

母親の主訴は、「家庭での生活がスムーズにできない。」「コミュニケーションがうまくとれない。」であった。そこで、R児の学習面・日常生活面について、筆者が事態把握を行った。母親・担任・コーディネーターに報告し、図2

のように支援方針を決定した。

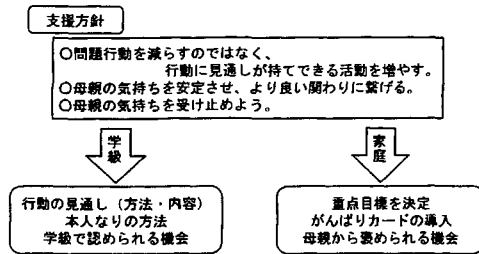


図2 支援方針

2) 第1次介入期

特に母親が困っていたのは、2年生の時からはほとんどしていない宿題と、学校の用意であった。そこで、ケース会議②において、1. 帰ったらすぐ宿題をする。2. 宿題が終わればすぐに明日の用意をする。という目標を設定した。がんばりカードを導入して支援を実施するが、母親が上手く支援できなかったため、目標・手立て・カードを修正し、新たにおうえんシールという意欲付けのツールを導入した。その結果、R児は毎日宿題に取り組むことができた。

3) 第2次介入期

夜更かし・朝寝坊など、夏休みにR児は大きくリズムを崩したため、二つ目の目標を2. 早く寝る。という目標に修正した。行事による多忙などの影響もあって、9月は支援が機能しなかった。ケース会議⑦においてそれぞれの苦悩が聞かれたが、その想いを受容し、頑張りを称賛するコンサルテーションを実施し、支援の方針を再確認した。

4) 移行期

ケース会議⑧より、コーディネーターがケース会議の司会を担当した。前回以降、R児への支援が再開され、生活リズムが改善し宿題を毎日することができた。

担任による新たな課題の報告と、コーディネーターの提案によって、放課後の個別学習の目標を設定し、筆者・担任・コーディネーターで役割分担をしながら取り組み始めた。ケース会議⑩では、担任による個別の宿題の実施が始まるなど、主体的に支援をしていく姿が見られた。

対象者の変化（ここでは母親の変化のみ記述する）

1) 実態把握期

R児について、「人の話を一部しか聞かない。」「したくないからわざとしない。」と捉えていた。また、自身の心情としては「私の関わり方が悪いからこうなっているんだ。」「関わり方としては、「厳しく注意してしまう。」「他の子どもにならば優しくできる。」と、歯がゆさや辛さを語った。

2) 第1次介入期

ケース会議②で目標を設定し、カードを用いて支援を実施したのだが、「頑張りを褒めることができない。」「“すぐに”できなかったから〇ができない。」と言い、R児の意欲が向上するような評価ができなかった。ケース会議③において、目標の修正やシールの導入をした結果、適切な評価ができるようになった。「R児が達成感を感じている。」「自

分が楽になった。」と、R児と自身の変容に気づき始めた。

3) 第2次介入期

夏休みにリズムを崩したR児について、「また元に戻ってしまった。」と落胆した。夏休み中は、R児が夢中になっているプラモデルを全部捨てるなどの行動も見られた。心情過程を理解したコンサルテーションを実施し、ケース会議⑥では、「いろいろ教えてもらってだいぶ理解ができた。」、ケース会議⑦では、「R児はようやく人の話が聞けるようになった。」「私が褒めるから嬉しいのだと思う。」など、ポジティブなコメントが聞けた。

4) 移行期

R児の支援が順調に続くようになり、「家庭内が非常に落ち着いている。」と語った。また、「良い行動に目が行くようになり、マイナス面を気にし過ぎることが減った。」と自身の変化を実感していた。さらに、「R児が反発した時に、時間を空けて対応することができるようになった。」と報告し、ケース会議⑨でアドバイスしたことが実施できた。このように、特性理解できたことが自身の行動に表れるようになり、関わり方が改善されてきた。

V. 考察（ここでは母親の支援に関してのみ）

母親の支援について

1. 母親のチームへの参加

支援開始当初は母親は支援の対象者としてサポートを受けていた。だが、ケース会議⑩になると、父親へ関わり方をアドバイスし、支援者の一人として役割を果たした。

2. 心情過程を理解したコンサルテーション

母親の心情によって、アドバイスしたことが受け入れられたり、そうでなかったりする。今回は田村・石隈（2007）のモデルを参考にした、母親の心情過程を理解したコンサルテーションに効果があった。また、心情を受容したうえで、R児や母親が今できる具体的な支援方法や、ツールを提案していくことも重要であった。

VI. 今後の課題

1. 学力面へのアプローチ

数ある課題の中で、支援できたこととできなかったことがあった。限られた時間と人員でどのようにアプローチしていくのか、様々な事例での検討が必要。

2. 長期休業中の支援

本事例でも、夏休みにリズムを崩した。空白の期間になりがちであるので、長期休業中の支援を以下にしていこうが課題となるだろう。

3. 保護者のスキルアップ

学校だけでは難しい面もある。ペアレントトレーニングや保護者同士が学び合う場の紹介など、早めに他機関と連携することもひとつであろう。

主任指導教員 宇野 宏幸